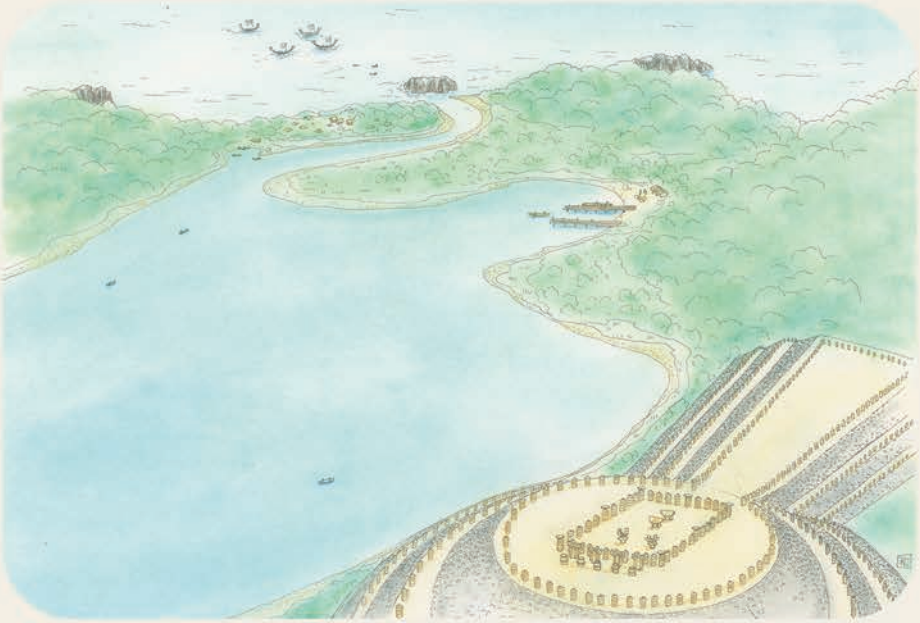
第150回 埋蔵文化財セミナー

2022
11/23[水/祝]
13:30－16:30
［開場 13:00～］

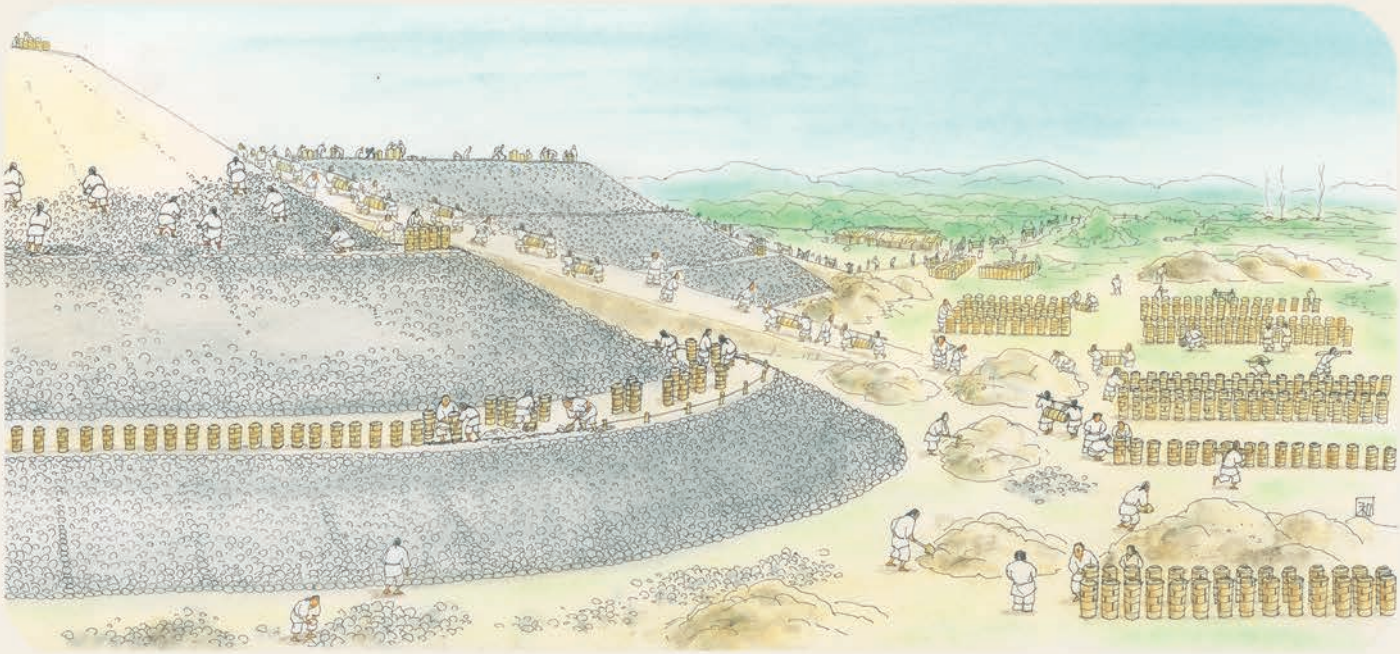
アグリセンター大宮
多目的ホール
（京丹後市役所大宮庁舎隣接）



築造当時の神明山古墳の様子　早川和子 画

古墳時代の丹後

主催：京都府教育委員会・（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
後援：京丹後市教育委員会



網野銚子山古墳の築造の様子　早川和子 画

最新の研究成果から、巨大古墳を生んだ丹後の古墳時代を解明！

第150回埋蔵文化財セミナー

「古 墳 時 代 の 丹 後」

日　程

13時30分　開会あいさつ

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

常務理事　事務局長　阿部篤士

趣旨説明　筒井崇史

13時40分　基調報告１

「この40年の発掘調査で明らかになった
丹後の歴史～三大古墳誕生の背景～」

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

課長補佐　肥後弘幸

14時10分　基調報告２

「網野銚子山古墳の発見とその後の展開
～丹後郷土誌研究の幕開け～　」

京丹後市教育委員会

文化財保護課長　新谷勝行氏

14時50分　休憩

15時　講　演

「丹後三大古墳の時代」

花園大学文学部教授　高橋克壽氏

16時30分　閉会

主　催　京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
後　援　京丹後市教育委員会
会　場　アグリセンター大宮　多目的ホール

この40年の発掘調査で明らかになった丹後の歴史
～三大古墳誕生の背景～

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
肥後 弘幸

１．はじめに

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター（以下「当調査研究センター」と表記）は、1981（昭和56）年に設立され、今年で42年目を迎えました。私は、設立の年に大学に入学し、３回生から丹後での発掘調査に参加してきました。当時、網野銚子山古墳の発掘調査を見学に行った時に、なぜ丹後にこのような大きな古墳が築かれたのか不思議に思いました。それ以来、その理由について考えることが私のライフワークになりました。

この40年間、丹後地域（旧国の丹後を指します）では、とてもたくさんの発掘調査が行われ、いくつか重要な発見がありました。本日は、これらの発見（＝調査成果）を踏まえて、三大古墳（京丹後市網野銚子山古墳・同神明山古墳・与謝野町蛭子山古墳）誕生の背景について、みなさまと考えてみる機会にしたいと思います。

２．この40年の丹後での主な発掘調査

（１）湯舟坂２号墳、大山墳墓群、蛭子山古墳の調査（1981～1984）

1981（昭和56）年、熊野郡久美浜町（現京丹後市久美浜町）須田で、府営ほ場整備に先立ち久美浜町教育委員会により湯舟坂２号墳の発掘調査が実施されました。当時久美浜町には文化財担当者がいなかったので、京都府教育委員会の技師が調査を担当しました。調査の結果、６世紀後半（古墳時代後期）に築かれた横穴式石室から金銅装双龍環頭大刀をはじめ多数の副葬品が出土しました。大刀はとても精巧なもので、古墳時代後期にこのような大刀をヤマト王権から下賜される有力な豪族が存在していたことが明らかになりました。現地説明会には、3,000人に及ぶ人が全国から参加され、地元でも文化財への関心が非常に高まりました。その後、２号墳は保存され、昭和58年に府史跡に、同年出土品は国の重要文化財に指定されました。

1981年、竹野郡丹後町（現京丹後市丹後町）大山では、丹後町教育委員会により、工業団地造成に先立ち大山墳墓群の調査が行われました。調査を担当したのは京都府教育委員会の技師でした。６基の台状墓から47基の埋葬施設が見つかり、鉄鏃・やりがんななどの武器・工具類とガラス管

玉などの装身具が出土しました。丹後地域における最初の弥生墳墓の本格的な調査で、１墳丘多埋葬、豊富な副葬品の存在などが明らかになりました。棺の蓋をしたのちに、破砕した土器をばらまくという葬送儀礼行為、「墓壙内破砕土器供献」の事例もこのとき確認されました。現在、出土品の多くは、京丹後市丹後町竹野にある丹後古代の里資料館で見ることができます。

1984（昭和59）年には、与謝郡加悦町（現同与謝野町）温江にある史跡蛭子山古墳で、町教育委員会の技師により、後円部にあった舟形石棺覆い屋の建て替えに伴う発掘調査が実施されました。蛭子山古墳は、全長145mを測る日本海側第３位の規模の大型前方後円墳です。昭和２年の丹後震災で倒壊した社を再建するにあたり掘り出された舟形石棺が、墳頂部にある覆い屋に保存されていました。調査では石棺のあった墓壙を囲んで埴輪列が検出され、その外側に竪穴式石室からなる第２埋葬施設などが存在することが明らかになりました。なお、この覆い屋建て替え事業をひとつの契機に、平成元年度からは、史跡蛭子山古墳・作山古墳の本格的な整備が開始されました。

（２）志高遺跡、高山古墳群、鴫谷東古墳群、遠所遺跡の調査（1986～1991）

舞鶴市志高では、由良川の改修工事に先立って志高遺跡の発掘調査が1980（昭和55）年から開始されていました。最初は舞鶴市教育委員会が調査を実施していましたが、1984年からは当調査研究センターが調査を実施しています。1986年の調査では、弥生時代中期の長さ一辺15.5mの貼石遺構が見つかりました（写真１）。最初は遺構の性格がわからなかったのですが、出雲や備後に見られる方形貼石墓であることが判明しました。また、1984年調査の奈具岡遺跡、1985年調査の寺岡遺跡で見つかった同様の遺構も、方形貼石墓であったことが判明しました。この調査では、川に突き出す積石遺構も見つかっていたのですが、当時その性格がわかりませんでした。平成８年に、長崎県壱岐の原の辻遺跡で、同様な遺構が見つかり、船着き場であることがわかりました。

1985（昭和60）年からは、丹後国営農地開発に伴う発掘調査が増えてきました。1986・1987年に当調査研究センターが実施した竹野郡丹後町（現京丹後市丹後町）徳光の高山古墳群の調査では、群中最大の直径18mの高山12号墳の横穴式石室から、７世紀初頭に製作された金銅装双龍環頭大刀の柄頭（写真２）が２点出土しました。ここにも、ヤマト王権から立派な大刀を下賜される豪族が存在したのです。12号墳は2003（平成15）年に府指定史跡に、出土品は市指定文化財になりました。

1986（昭和61）年から1989（平成元）年にかけて、立命館大学が、加悦町温江で、鴫谷東古墳群の発掘調査を実施しました。鴫谷東１号墳は、直径54mを測る大円墳で、墳丘裾の葺石と埴輪列が非常に残りの良い状態で見つかりました。丹後の三大古墳には、特徴的な丹後型円筒埴輪が用いられていましたが、三大古墳より新しい５世紀前半の大円墳には、畿内型の円筒埴輪のみが樹立していることがわかりました。

当調査研究センターが実施した竹野郡弥栄町（現京丹後市弥栄町）鳥取ほかの遠所遺跡の調査では、1991（平成３）年に古墳時代後期から平安時代前期の間に営まれた製鉄工房が発見されました。

225,000㎡の調査で検出された遺構は、古墳時代の竪穴建物47基以上、奈良時代後期の掘立柱建物多数、古墳時代～平安時代の製鉄炉５基、古墳時代～平安時代の炭窯112基、奈良時代の須恵器窯３基などです。山間部に製鉄をはじめ窯業も行なう一大工房が存在したのです。この調査で、砂鉄を原料とした丹後での古代の製鉄の実態が明らかになりました。なお、奈良時代後期以降、製鉄遺構は周辺のニゴレ遺跡、黒部遺跡などに拡散していきます。また、奈良時代の製鉄工房が良好な状態で見つかった地区は、保存され、平成13年に府史跡遠處製鉄工房跡として指定されました。

（３）加悦町立古墳公園、三坂神社墳墓群、大田南５号墳、奈具岡遺跡の調査（1992～1995）

史跡蛭子山古墳・作山古墳では、1989（平成元）年から文化庁の補助金事業として始まった「ふるさと歴史広場」整備事業の第１号として、３年間かけて本格的な遺跡の復元整備事業が行なわれました。1992年には、はにわ資料館を含む古墳公園が開園しました。わかりやすい復元整備は、国民の関心も高く、全国から多くの観光客が訪れ、加悦町は古墳の町として知られるようになりました。また、加悦町教育委員会を中心に文化財の研修会や古墳公園を利用した催し物が実施され、地元での文化財への関心も高くなりました。なお、その後、「ふるさと歴史の広場」事業は、全国各地で実施され、遺跡公園の整備が進みました。

1992（平成４）年には、中郡大宮町（現京丹後市大宮町）三坂にある三坂神社墳墓群の調査が、大宮町教育委員会によって実施されました。６基の台状墓に営まれた39基の埋葬施設からは、素環頭鉄刀をはじめとする鉄製武器・工具20点、ガラス勾玉をはじめとるす玉類3,068点が出土しました。最初に営まれた３号墓第10主体部は、長さ5.7m・幅4.3m・深さ1.8mの巨大な墓壙を持ちます。底に設置された組合せ式木棺の中には、額にガラス管玉などからなる頭飾り、左腰には大陸製の素環頭鉄刀と弓矢、右手には黒漆塗りの儀杖を持った人物が葬られていました。頭の横には立派なやりがんなが添えられ、棺の蓋をしたのち破砕した土器をばらまいていました（墓壙内破砕土器供献）。被葬者は、海を渡って交易を行ない、丹後に豊富な鉄製品・ガラス製品をもたらした首長と考えられます。出土品は、2000（平成12）年に府指定文化財に指定されました。

1994（平成６）年には、峰山町教育委員会と弥栄町教育委員会が合同で町境の大田南５号墳の調査を実施しました。長さ18.8m・幅12.3mの方墳には５基の埋葬施設が営まれており、中心部に営まれた組合せ式石棺から、鉄刀と青龍三年銘方格規矩四神鏡が出土しました。魏の年号を持つ鏡が出土したことから、丹後地域が邪馬台国などとともに魏へ朝貢していたクニの一つである可能性が高まりました。また、卑弥呼が使者を送った景初３（239）年の４年前の年号を持つ鏡であったことから、卑弥呼の鏡についての議論も再燃しました。出土品は1996（平成８）年に国の重要文化財に指定されました。なお、1990年に調査を実施した長辺22m・短辺18mの２号墳からは、後漢で作られた画文帯環状乳神獣鏡が出土しています。

1995（平成７）年の丹後国営農地開発に伴い当調査研究センターが実施した弥栄町溝谷の奈具岡

遺跡の発掘調査では、1992年に見つかった緑色凝灰岩を原料とする玉作り工房に隣接して、水晶を原料とした玉作り工房が見つかりました。小鍛冶による鉄製品の再加工も実施していたようで、鉄板の端切れのようなものが多数出土しました。水晶による玉作り（写真３）、鉄の再加工など、当時の最新技術を携えた工房の存在は、半島から鉄製品を得ることが容易だった丹後の弥生時代における先進性を示すものと考えられました。

（４）浦入遺跡、浅後谷南遺跡の調査（1997）

当調査研究センターは、舞鶴火力発電所の建設に先立ち、舞鶴市千歳の浦入遺跡の発掘調査を1995（平成７）から1997（平成９）年の３年間実施しました。若狭湾に面した砂嘴の付け根で行った1997年の調査では、縄文時代前期の包含層で埋もれた丸木舟が出土しました。長さ８ｍ以上・幅1.0ｍを測る大型の丸木舟（写真４）で、この丸木舟で外洋にも漕ぎ出していったのではないかと議論を集めました。この丸木舟は2006年に市指定文化財に指定され、現在舞鶴赤れんがパークで展示されています。

同年、同じく当センターが竹野郡網野町（現京丹後市網野町）高橋で実施した浅後谷南遺跡の調査では、古墳時代前期の導水施設（写真５）が見つかりました。中央部に樋をもつ全長3.5ｍの導水施設の前に堰板を持つもので、水を浄化する施設と考えられます。導水施設は畿内を中心に類例があり、古墳時代の祭祀の姿を復元できるものの一つとされています。上流側にも同様な施設が存在し、2007（平成19）年に導水施設を構成する木製品８点が、「水祭祀遺物」として府指定文化財に指定されました。

（５）大風呂南墳墓、赤坂今井墳墓（1998・2000）

1998（平成10）年与謝郡岩滝町（現同与謝野町）岩滝で、天橋立を眼下にする丘陵上に位置する長辺27ｍ・短辺18ｍに復元できる弥生時代後期の墳墓から、長辺7.3ｍ・深さ2.0ｍの巨大な埋葬施設が見つかりました。その中に収められた舟底状木棺から、ガラス釧、貝釧、銅釧13点、ガラス勾玉10点、碧玉管玉273点、鉄剣11本、ヤス、鉄鏃などが出土しました。北部九州の副葬品豊かな王墓に匹敵する近畿北部の首長墓の存在が明らかになったのです。その被葬者像は、後漢や魏に朝貢していた魏志倭人伝に記された「今、使役を通じる三十国」とされる国（クニ）の一つ、近畿北部のクニの王と言えるものです。副葬された青く輝くガラス釧と11本の鉄剣は、玉と鉄の交易を支えた被葬者の表象なのでしょう。ガラス釧を含む出土品は2001年に重要文化財に指定されました。

2000（平成12）年には、前年度その存在が明らかになり保存が決まった中郡峰山町（現京丹後市峰山町）赤坂の赤坂今井墳墓が、峰山町教育委員会と当調査研究センターにより調査されました。弥生時代後期末（３世紀前半）に営まれた東西36ｍ・南北39ｍ・高さ3.5ｍの大形の墳丘墓で、墳頂部に６基、墳裾に19基以上の埋葬施設が営まれていました。中心埋葬施設は、長さ14ｍ・幅10.5ｍ

の墓壙を持ち、内部には舟底状木棺を納めていたと推測されます。第二の規模を測る第４埋葬施設には、ガラス勾玉33点以上・ガラス管玉88点以上・碧玉管玉63点以上から構成される頭飾りを持つ人物が埋葬されていました（写真６）。山陰の西谷３号墓、吉備の楯築墳丘墓に比肩する大形墳丘墓の存在は、近畿北部の王権の成長とクニの発展を示すものと考えられます。日本海側から、中郡盆地（当時の中心地か）に入る峠に位置することから、海からの来訪者を強く意識した墳墓とも考えられました。2007年に国史跡に、出土品は2010年に府指定文化財に指定されました。

（６）日吉ヶ丘（ひよしがおか）遺跡（2001～2004）

2001（平成13）年から始まった与謝郡加悦町（現同与謝野町）明石（あけし）の日吉ヶ丘遺跡の発掘調査では、２条の環濠に囲まれた弥生時代中期の拠点的集落の存在と、その一角に営まれた巨大な方形貼石墓の存在が明らかになりました。方形貼石墓は、長辺32m・短辺20mを測る弥生時代中期としては、佐賀県吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓に次ぐ大きさのものです。墳丘上には埋葬施設が一つのみ営まれており、内部からは朱と677点以上の碧玉製管玉が出土しました。遺跡内（調査面積9,400㎡）からは、半島製の鉄斧をはじめとする20点に及ぶ鉄製品が出土しており、鉄の入手が容易な丹後を代表する豊かな集落として評価されます。近畿地方での弥生時代中期の集落からの鉄製品の出土は少なく、たとえば、府南部の市田斉当坊遺跡（調査面積10,600㎡）では、長さ2.5cm・幅２cmの小形板状鉄斧１点しか出土していません。弥生時代中期に鉄を手に入れることのできる丹後の先進性を示す成果でした。保存された方形貼石墓は、2005年に「日吉ヶ丘・明石墳墓群」として国史跡に指定されました。

（７）網野銚子山古墳（2007～）

21世紀を迎え、丹後では開発に伴う発掘調査がめっきり少なくなりました。2004（平成16）年に中郡・竹野郡・熊野郡の６町が合併して誕生した京丹後市では、2007年から、史跡網野銚子山古墳の整備を進めるための調査が開始されました。全長198mと考えられていた墳丘の大きさが201mにも及ぶことなど新たな成果がまとめられようとしています。

また、昨年度からは、京都縦貫道の京丹後市への延伸に伴う発掘調査が本格化してきました。新たに、丹後の歴史を解明する資料が発見されることが期待されます。

３．三大古墳の誕生前の丹後の歴史を考える

（１）弥生時代中期の丹後

日吉ヶ丘遺跡、奈具岡遺跡の調査は、貴重な鉄の恒常的な入手が丹後では弥生時代中期には始まっていたことを明らかにしました。また、畿内地域に比べてはるかに多い鉄製品の出土は、丹後から半島に直接交易し鉄を求めていた可能性を教えてくれます。

奈具岡遺跡では、緑色凝灰岩と水晶を原料とする玉作りと鉄の再加工が行われていました。大

規模な工房が営まれ、先進技術の確保と維持、そして加工品による交易に努めた豊かなムラの姿がうかがえます。

拠点的集落と呼べる志高遺跡・日吉ヶ丘遺跡・奈具岡遺跡では山陰地域と共通した方形貼石墓が営まれていました（第１図）。丹後は、畿内地域よりも日本海を共有した山陰地域と密接な関係があったことが想像されます。後期になると山陰地域では、出雲地域を中心に方形貼石墓が四隅突出型墳丘墓に変化し、墳丘が大きくなっていきます。一方、丹後・但馬では、副葬品豊かな台状墓が営まれるようになります。

（２）弥生時代後期の丹後

丹後・但馬・北丹波・西丹波からなる近畿北部には、次の①から④特徴を持つ統一的な墓制が営まれます。①集落から離れた丘陵の上での台状墓の造営。②１墳丘に大小多数の埋葬施設を設置。③棺に蓋をしたのち、棺蓋の上などに破砕した甕・水差しなどを供献（墓壙内破砕土器供献）。④鉄製武器・工具やガラスなどの装身具の副葬です。また、この地域では、擬凹線文という文様で土器を飾ることが多く、統一的な土器様式を持っていることが知られています。近畿北部の中でも、丹後には、埋葬施設が大きく副葬品が豊かな三坂神社３号墓、大風呂南１号墓、赤坂今井墳墓と有力な首長墓（王墓）が営まれています。これらのことから、近畿北部が当時倭国内の有力なクニの一つとして栄えており、その中心が丹後であったことが推定できます（第２図）。

（３）古墳時代の始まりと丹後

赤坂今井墳墓に続く巨大な首長墓は見られません。この時期の首長墓である大田南２・５号墳は、墳丘長20mほどと小さく、前代にはなかった鏡が副葬されていました。２号墳の画文帯環状乳神獣鏡は後漢から、５号墳の青龍三年銘方格規矩四神鏡は魏からもたらされたものと考えられます。大田南古墳群の被葬者は、後漢・魏への使節団の構成メンバーの一人だったのかもしれません。

ところで、両古墳には、前代によく見られた水晶とガラスからなる装身具や多量の鉄製品は副葬されていませんでした。このことは、近畿北部が独自に交易する権利を失い、ヤマト王権に組み込まれたことを示しているようです。

４．古墳時代前期の丹後を考える

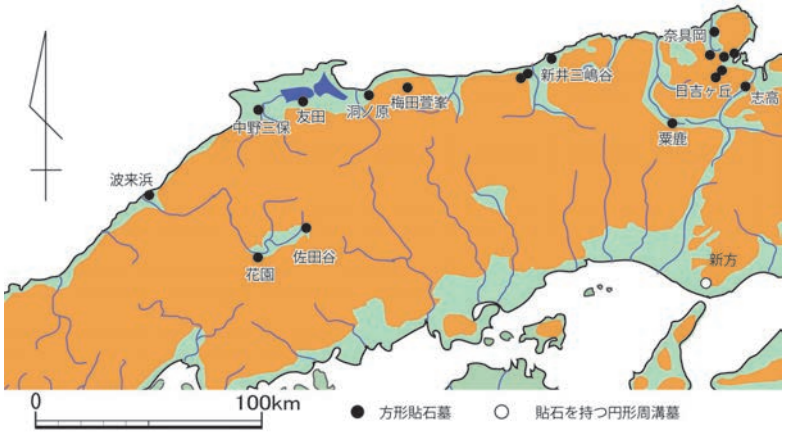
三大古墳が出現するまでの丹後の古墳の様相については、大田南古墳群に続く首長墓がみつかっていないなどよく分かっていません。しかしながら、全国で500枚以上出土している三角縁神獣鏡が、与謝野町の温江丸山古墳の１枚を除いて出土していないことから、この地域に、ヤマト王権の象徴ともいえる鏡がほとんどもたらされていないと言えるでしょう。３世紀の後半から４世紀前半までの丹後は、ヤマト王権にとっては、三角縁神獣鏡などの権威の象徴でもある贅沢（ぜいたく）品を下賜する必要のない地域になっていたようです。

４世紀後半に首長墓としての大型前方後円墳の出現するまで、100年ほどの空白が生じています。４世紀の後半以降、３基の大型前方後円墳が続いて築かれるのは、弥生時代に丹後が海を渡った交易のもと栄えたことを考えると、ヤマト王権が丹後地域を再び大陸との窓口として必要としたことなどが想像されます。当時の全国の状況、丹後地域の立ち位置などその歴史的背景を考え、三大古墳の出現の謎をより一層明らかにしていく必要があると考えています。

丹後での主要な発掘調査（1981 年～）

	できごと	遺跡名	所在地	時代	調査主体
1981（昭 56）	金銅装双龍環頭大刀の発見	湯舟坂２号墳	京丹後市久美浜町須田	古墳時代後期	久美浜町教育委員会
1981（昭 56）	台状墓のはじめての本格的調査	大山墳墓群	京丹後市丹後町大山	弥生時代後期	丹後町教育委員会
1984（昭 59）	大型前方後円墳墳頂部の調査	史跡蛭子山古墳	与謝野町明石	古墳時代前期	加悦町教育委員会
1986（昭 61）	方形貼石墓の発見	志高遺跡	舞鶴市志高	弥生時代中期	京都府埋文センター
1987（昭 62）	双龍金銅装柄頭の発見	高山 12 号墳	京丹後市丹後町徳光	古墳時代後期	京都府埋文センター
1990（平２）	加悦谷の大形円墳の調査	鳴谷東古墳群	与謝野町温江	古墳時代中期	立命館大学
1991（平３）	古代の一大製鉄工房の発見	遠所遺跡	京丹後市弥栄町鳥取・木橋	古墳時代後期～奈良時代	京都府埋文センター
1992（平４）	大規模史跡公園の開園	史跡蛭子山古墳、作山古墳	与謝野町加悦・明石	古墳時代前期	加悦町教育委員会
1992（平４）	副葬品豊かな墳墓群の調査	三坂神社墳墓群	京丹後市大宮町三坂	弥生時代後期	大宮町教育委員会
1994（平６）	青龍三年銘鏡の出土	大田南５号墳	京丹後市弥栄町・峰山町境	古墳時代初頭	弥栄町教育委員会、峰山町教育委員会
1995（平７）	水晶玉作工房の発見	奈具岡遺跡	京丹後市弥栄町溝谷	弥生時代中期	京都府埋文センター
1997（平９）	大形丸木舟の出土	浦入遺跡	舞鶴市千歳	縄文時代前期	京都府埋文センター
1997（平９）	古墳時代の導水施設の発見	浅後谷南遺跡	京丹後市網野町高橋	古墳時代前期	京都府埋文センター
1998（平 10）	青いガラス釧をもつ王墓の発見	大風呂南墳墓	与謝野町岩滝	弥生時代後期	岩滝町教育員会
2000（平 12）	大型墳丘墓の調査	赤坂今井墳墓	京丹後市峰山町赤坂	弥生時代後期	峰山町教育委員会、京都府埋文センター
2001（平 13）	大形方形貼石墓の発見	日吉ヶ丘遺跡	与謝野町加悦	弥生時代中期	加悦町教育委員会
2007（平 19）	網野銚子山古墳の整備に向けた調査の開始	網野銚子山古墳	京丹後市網野町網野	古墳時代前期	京丹後市教育委員会

調査が複数年にわたる場合は、代表的な年を記した。



第１図　日本海側に分布する弥生時代中期の方形貼石墓

第２図　３世紀はじめ頃の東アジア

写真１　志高遺跡で見つかった方形貼石墓

写真２　高山12号墳から出土した金銅装環頭柄頭

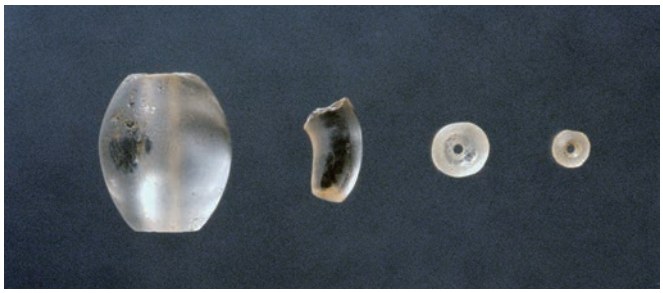


写真３　奈具岡遺跡で生産された水晶玉

写真４　浦入遺跡で発見された丸木舟

写真５　浅後谷南遺跡での導水施設検出状況

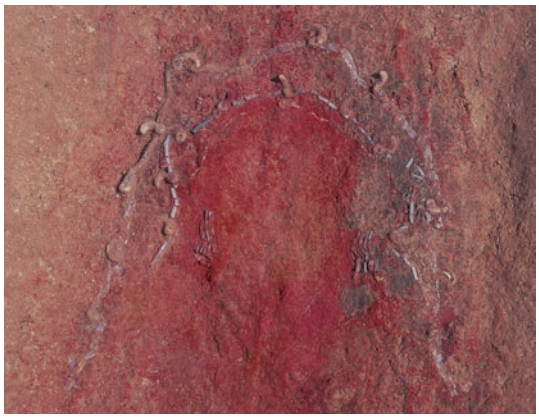


写真６　赤坂今井墳墓第４埋葬から出土した頭飾り

京埋セミナー資料 No.150 － 462

網野銚子山古墳の発見とその後の展開
～丹後の郷土史研究の幕開け～

京丹後市教育委員会文化財保護課
新谷 勝行

１．はじめに

京丹後市網野町網野に所在する網野銚子山古墳は、古墳時代前期後半に造られた墳丘長201ｍを測る日本海側最大の前方後円墳です。また、近接する小銚子古墳と寛平法皇陵古墳という二つの円墳は、銚子山古墳の陪塚と考えられています。これら三古墳は、今から100年前、大正11（1922）年に、文化財保護法の前身のひとつ「史蹟名勝天然紀念物保存法」により「銚子山古墳、第一古墳、第二古墳」として史跡に指定されました。

本報告では、網野銚子山古墳の史跡指定までの経過を振り返り、丹後の郷土史研究のようすを概観するものとします。なお、「史跡」は、指定当時、「史蹟」でしたが、現在使われている「史跡」に表記を統一しています。

２．亭子山と法皇堂

宝暦13（1763）年に書かれた『丹後州宮津府志』には、寛平法皇陵古墳の記述があり、掘り出された石棺のスケッチが掲載されています。また同年から天保年間（～1830）までに編さんされた『丹哥府志』には、この古墳に石室があったことに加え、「元より法皇の陵は亭子山にありと語り伝ふ」と記されています。二つの書に記される寛平法皇は、第59代の宇多天皇（867-931）のことであり、網野村には寛平法皇の御陵が「亭子山」にあったという言い伝えがあったとわかります。

この「亭子山」という地名は、明治６（1873）年作成と推定される網野村地籍図【写真１】に、網野銚子山古墳が所在する場所の小字名として記されています。そのため、『丹哥府志』のいう「亭子山」は、網野銚子山古墳を指す可能性が高いことがわかります。

さらに明治28（1895）年12月に作成された「古堂取調書」【写真２、旧網野町役場文書001】には、寛平法皇陵古墳上に立つ法皇堂の左側に「亭子山」という前方後円墳の形をした山が描かれています。この内容から、当時の網野村の人々は、網野銚子山古墳を「亭子山」と認識していたことがわかります。「亭子山」の下には壺が描かれており、「中殿ニ凡六尺

ノ間ヲ置キ山中ニ沢山見ユル也」と記されています。ここに描かれた壺は、丹後型円筒埴輪上部の破片を誤認したものでしょう。埴輪のタガは、把手のように描かれています。

これらの史料から、『丹後州宮津府志』の記された江戸時代後期より明治20年代までの網野銚子山古墳は、「亭子山」と呼ばれており、寛平法皇（宇多天皇）の陵墓と考えられていたことがわかります。

３．佐藤伝蔵の調査　～網野銚子山古墳の発見～

明治31（1898）年６月の『東京人類学会雑誌』第147号には、稲葉宅蔵の「丹後網野附近遺跡探究紀行」という一文があります。これによると、久美浜の稲葉市郎右衛門・宅蔵兄弟は、先に丹後へ出張し網野付近の古墳調査を行った東京帝国大学理科大学（現在の東京大学）助手の佐藤伝蔵（1870-1928）の依頼により、明治31年５月に銚子山古墳の写真撮影を行ったことがわかります。稲葉市郎右衛門は、久美浜の「豪商稲葉本家」の当主で、明治27年10月から30年12月まで国会議員でした。稲葉と佐藤の接点は、国会議員の時代にあったのではないかと推測されます。

この佐藤の調査に関わる資料は、旧網野町役場文書001に残されていました。

佐藤は、東京に戻った後、網野銚子山古墳に関する所見を、東京帝国大学理科大学人類学教室用紙５枚に記して網野村役場へ送付しています【写真３】。全文は次のとおりです。

「丹後国竹野郡網野村銚子山ニ就テ

京都府下丹後国竹野郡網野村ニ於テ銚子山ト称シ居ルモノハ自然ノ丘陵ニアラズ人類学者ノ所謂古墳ト称スル者ニシテ其年代ヲ云ヘハ今ヲ距ル〻大凡一千二百年乃至二千年来ノ者ナリ其如何ナル人ヲ葬レルヤハ単ニ之ヲ一見シタルノミニテハ固ヨリ容易ニ断定ヲ下ス能ハスト雖モ之ヲ外部ノ形式其他ノ模様ニ徴シ尚ホ之ヲ他ノ諸地方発見ノ古墳ト比較シ考フルニ単ニ可ナリニ高貴ナル人ヲ葬レル墳塚ナリト云フコトヲ断言シ得ヘキノミ

山ノ外側ニ段階ヲ為シテ壷様ノ土器ヲ樹立セルハ即チ埴輪円筒ニシテ此類ノ古墳ニハ屢〻之ヲ見ル所ナリ

凡テ埴輪ハ決シテ円筒ノミニ限ラズ其他人馬等ノ類ヲ模セル者ヲ樹立セルコト他所ニ多ク之ヲ見ル所ナリサレハ銚子山ヨリモ亦必ス円筒以外ノ樹物ヲ発見スルヤ余ノ信シテ疑ハザル所ナリ況ンヤ已ニ発見セル埴輪ノ破片中複雑ナル一種ノ沈紋ヲ有シ円筒ニアラサルモノアルニ於テオヤ

凡テ人類学者ノ所謂古墳ト称スル者ノ外部ノ形状ニハ円形ヲ為スモノト瓢形ヲ為ス者トノ二種アリ而シテ瓢形ヲ為ス者ノ中ニ前方後円ノ者前後共円形ノ者及ヒ前後共角度ヲ為ス者トノ三種ノ別アルカ銚子山ハ即チ前方後円ノ瓢形ノ者ニ属スルナリ而シテ其長径凡ソ六十間後円ノ直径凡ソ

三十間ニシテ其大サハ凡ソ古墳ト称スル者ノ中ニテ中等ニ位スル者ナレバ其身分ノ如キモ恐クハ可ナリニ高貴ノ人ナラント思考ス

銚子山ノ附近ニ小銚子山ト称スル瓢形ノ小丘及ヒ茶臼山（ちゃうすやま）ト称スル円形ノ小丘其他法王堂ト称スル円形ノ小丘ハ亦決シテ自然ノ丘陵ニアラズ所謂大古墳ノ陪塚ニシテ従者其他親密ノ関係アル者ヲ葬レルモノナリ此等陪塚ヲ有スルノ点其他外部ノ形状及大サ等ヨリシテ銚子山ハ決シテ平凡ノ人ノ墳墓ニアラサル㇀ハ余ノ信シテ疑ハサル所ナリ古墳ニハ石棺槨（せっかんかく）ノ存スルモノアリ又存セサルモノアリ其存スルモノハ内部ニ小石ヲ敷キ遺体ヲ其上ニ置キ副葬品（刀剣類玉類土器類等）ヲ其周囲ニ配列シ置クヲ常トス此石棺槨ノ有無ハ内部発掘調査ノ上ニアラサレバ容易ニ断言スルヲ得スト雖モ其陪塚タル法皇堂ニ石棺ヲ露出セリシ事実（明治三十一年四月二日稲葉宅蔵氏口話）ヨリシテ考レハ此銚子山ニモ亦同様ニ石棺槨ヲ存セルナラン乎

以上ハ単ニ其外部ヲ一見シタルノミニテ推測ヲ下セル者ナレバ甚タ粗雑ナルヲ免レサルモ其詳細ノ事実ハ更ニ精密ノ調査ヲ遂ケタル以上ニアラサレハ確言スル能ハサルナリ

東京帝国大学人類学教室ニテ

明治三十一年六月　　理学士　佐藤伝蔵」

佐藤が記した内容は、当時の考古学の知識としては最新の情報であり、現在の目で見てもおおむね問題がないものです。あわせてこの書簡には、銚子山古墳の研究史上、重要な情報が記されています。

①佐藤は、法皇堂（寛平法皇陵古墳）より石棺が出土したことを明治31年４月２日に稲葉宅蔵より聞いたと記しており、佐藤はこの日に網野銚子山古墳を訪れたことがわかります。

②あわせて稲葉宅蔵は、寛平法皇陵古墳から石棺が出土したことを知っていたこと。

③佐藤の調査以前に「壷様ノ土器」が採集されていて、佐藤はこれを埴輪と認識したこと。

④佐藤は、小銚子古墳と寛平法皇陵古墳を銚子山古墳の陪塚として認識していたこと。

そして何よりも佐藤伝蔵の現地調査により、網野銚子山古墳は、寛平法皇の御陵ではなく、古墳（前方後円墳）であることがはじめて認識されたことがわかります。佐藤の調査は、網野銚子山古墳の発見と言っても過言ではないでしょう。

なお稲葉市郎右衛門は、自身が撮影した銚子山古墳の写真２葉を網野村役場へ送っています【写真４】。裏面には、写っている人物名や市郎右衛門が詠んだ漢詩・俳句が記されています。

4．増田于信の調査と『京都府竹野郡誌』

明治43（1910）年７月１日には、宮内省御用掛の増田于信が丹後地域を訪れています。増田来丹の目的は、丹波道主命の墳墓が熊・竹野郡方面にあるように思われ、現地調査を行うためでした（稲葉家文書Ｃ50-136）。稲葉宅蔵の日記（稲葉家文書Ａ28-007）によれば、増田は6月30日に久美浜から網野銚子山古墳、竹野郡役所へ至り、７月１日には稲葉宅蔵・坪倉重和（竹野郡教育会長）・柴田勝治（網野尋常高等小学校長）・小倉瀧蔵（竹野郡書記）の案内で網野銚子山古墳・兎毛古墳・離湖古墳・離山古墳をまわり、神明山古墳・竹野尋常小学校周辺の遺跡・小学校所蔵資料を見て峰山に向かっています。この日の調査に同行した竹野郡役所小倉書記は、竹野郡役所文書「明治四十三年古墳調査一件」（京都府行政文書：京都府立京都学・歴彩館所蔵）に復命書を残しています。復命書によると、増田は、「一小浜離湖上古跡（註：離湖・離山古墳）ハ別ニ由緒アルモノニアラズ、一小浜掛津界ノ石棺（註：兎毛古墳）モ別ニ由緒アルモノニ思ワレズ」とし、神明山古墳を「丹波道主命カ彦坐王カ又ハ竹野波津羅別王カノ三方ノ一ナラント思ワル」という見解を示したことがわかります。これらの内容からは、増田の遺跡に対する認識が垣間見えます。

次に『京都府竹野郡誌』の網野銚子山古墳に関する記述を見ていきます。本書は、序文・緒言によれば、明治40（1907）年に京都府教育会竹野郡部会へ委嘱し、柴田勝治を中心に編さんされたもので、大正４（1915）年に発刊されました。明治43年の増田の調査は、郡誌編さんがはじまった時期にあたることがわかります。網野銚子山古墳に関する記述は、町村誌の網野町の項のほか、京都府立第四中学校（現在の京都府立宮津天橋高等学校）の加藤鉄三郎教諭が執筆した「竹野郡歴史地理考」にあります。加藤は、網野神社の祭礼の時、最初に神輿を網野銚子山古墳にもってくること、ミヤケという地名が残ることなどから、網野銚子山古墳と網野神社との関係を考え、また彦坐王との関わりを推定しています。町村誌の項目では、銚子山の陪塚として小銚子の存在を記すほか、丹波道主命または日子坐王の御陵であるとの伝説を記載しています。

先に見たように、地元では、明治31年の佐藤伝蔵の来丹まで網野銚子山古墳を寛平法皇の御陵と伝えていましたが、『京都府竹野郡誌』の町村誌の項にはそのような記載は全く見られません。丹波道主命または日子坐王の御陵との伝説は、明らかに増田来丹の影響と考えられます。

このように増田の調査は、地元の歴史研究へ大きな影響を与えたと推定されます。

５．梅原末治（うめはらすえじ）の調査と史跡指定

京都府史蹟勝地調査会は、大正６（1917）年に発足し、府内各地の史跡などの実地調査を行いました。委員であった京都帝国大学（現在の京都大学）助手の梅原末治は、大正７年３月20日から29日にかけて中・竹野郡と与謝郡の一部の調査を実施しています。

この時、梅原は網野銚子山古墳を訪れ測量図を作成し、「神明山古墳ト共ニ丹後ニ於ケル最大ナルモノタルト共ニ、亦広ク山陰道中ニ於イテ比類少キ古墳ナリ」と報告しています。あわせて銚子山古墳・小銚子古墳は埴輪（はにわ）・葺石（ふきいし）の存在を、寛平法皇陵古墳は祠（法皇堂）の下に石室が露出していた点と、20余年前（明治30年代）に採集された石枕（京丹後市指定文化財）の写真が掲載されています。

梅原の調査により網野銚子山古墳は、丹後のみならず山陰道中において比類のない古墳という評価がされ、大正11（1922）年の史跡指定につながりました。

【文献】

○梅原末治「銚子山古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第一冊　京都府　1919年）
○京丹後市古代の里資料館　平成十八年度丹後古代の里資料館春期企画展示『函石浜遺跡とその発見者たち』　2006年
○京丹後市立丹後古代の里資料館　平成20年度丹後古代の里資料館コーナー展示２「網野銚子山古墳の世界」展示解説シート　2008年（京丹後市HPに公開）
○京丹後市役所　京丹後市史資料編『京丹後市の考古資料』　2010年

写真１　網野村地籍図にみる「亭子山」（京丹後市教育委員会所蔵）

写真２　「古堂取調調書」（旧網野町役場文書001、京丹後市教育委員会所蔵）

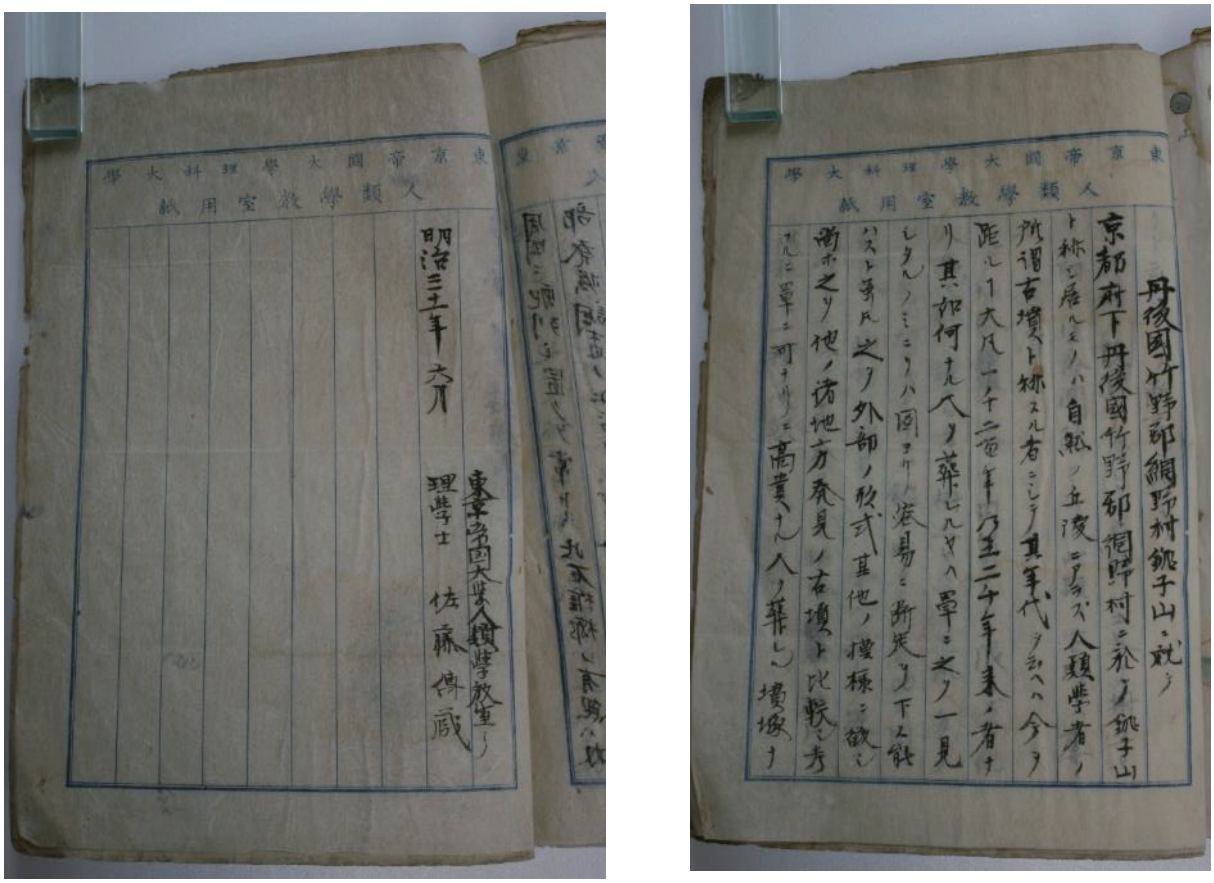


写真３　佐藤伝蔵の書簡（旧網野町役場文書001、京丹後市教育委員会所蔵）

写真４　明治31年に稲葉市郎右衛門が撮影した網野銚子山古墳（京丹後市教育委員会所蔵）

メモ用紙

京埋セミナー資料 No.150 － 463

丹後三大古墳の時代

花園大学文学部
高橋克壽

はじめに

古墳時代の大和王権と地域

天皇中心の日本国家の特質を考えるために　丹後地域の重要性

1．弥生時代後期の日本海岸勢力の実像

クニの成長　弥生時代後期には旧郡程度の政治的まとまりが中国には国と見えた

丹後における王墓の発達

大宮三坂神社10号墓、岩滝大風呂南１号墓、峰山赤坂今井墳丘墓等

畿内を凌（しの）ぐ鉄・ガラスの潤沢な副葬　九州を除けば突出

深い墓壙（ぼこう）、船底状墓壙底をともなう埋葬施設：上越地方へも波及

銅釧（くしろ）の広がり　王の活動は東海方面にも及ぶことを示唆　越前とも

四隅突出型墳丘墓の発達した山陰出雲の影響が強まる　土器様式の分析から

このころ、畿内では、纒向（まきむく）遺跡に邪馬台国（やまたいこく）のミヤコが形成　東海勢力と関係均衡

→対中国外交掌握、瀬戸内海連合の強化により、しだいに大和王権の覇権が確立＝

古墳時代へ　相対的に丹後の存在感低下

2．三大古墳前の丹後

３世紀後半～４世紀初

謎の年号鏡　京丹後市大田南（おおたみなみ）５号墳の青龍（せいりゅう）三年鏡、福知山市広峯（ひろみね）古墳の景初（けいしょ）四年鏡

王墓とは思えないクラスの墓で出土　大和王権を介さない入手の可能性あり

弥生時代後期から引き続いて小規模古墳が丘陵上に群在

４世紀前葉～中葉

加悦谷（かやだに）の重要性の高まり

峰山ではカジヤ古墳の登場　不整形円墳という特質は何を意味するのか

王墓としての大型前方後円墳受容　白米山（しらげやま）古墳

福知山盆地経由のルートの重要性増す

3.三大古墳のあいつぐ造営

作山（つくりやま）１号墳　直径28mの造り出し付円墳、組合式石棺、鏡、石釧、鉄剣12ほか
家形埴輪、円筒埴輪列、土製供物（くもつ）
墳丘裾に埴輪棺や木棺の従属埋葬15基

蛭子山（えびすやま）１号墳　全長145m、後円部中央に舟形石棺、東西に竪穴式石室と木棺直葬埋葬施設。墳頂に家形埴輪などの形象埴輪、動物形土製品、各所に円筒埴輪列
副葬品に舶載内行花文鏡（ないこうかもんきょう）、刀剣槍、鉄製工具類など

網野銚子山（ちょうしやま）古墳　全長198m、埋葬施設は詳細不明、円筒埴輪列
大将軍遺跡（だいじょうぐ）の蓋（きぬがさ）形埴輪は本墳に供給か？小銚子古墳付属

丹後神明山（しんめいやま）古墳　全長180m、埋葬施設は竪穴式石室か、各種形象埴輪と円筒埴輪列
副葬品に石製壺・合子（ごうす）・椅子（いす）

黒部（くろべ）銚子山古墳　全長100m、埋葬施設詳細不明、円筒埴輪列

その後は急激に縮小　円墳、不整形円墳復活

4.三大古墳の時代と全国の巨大古墳

（太平洋側）

九州　宮崎県生目（いきめ）３号墳　137m、大分県亀塚（かめづか）古墳　114m
吉備　岡山県神宮寺山（じんぐうじやま）古墳　150m、同金蔵山（かなくらやま）古墳　165m
播磨　兵庫県五色塚（ごしきづか）古墳　200m
丹波　京都府園部垣内（そのべかいち）古墳　84m
近江　滋賀県安土瓢箪山（あづちひょうたんやま）古墳　134m
東海　静岡県松林山（しょうりんざん）古墳　107m、岐阜県昼飯大塚（ひるいおおつか）古墳　150m
甲信　山梨県甲斐（かい）銚子塚古墳　169m
関東　茨城県梵天山（ぼんてんやま）古墳　160m、群馬県前橋天神山（てんじんやま）古墳　130m
東北　宮城県雷神山（らいじんやま）古墳　168m

（日本海側）

九州　福岡県鋤崎（すきざき）古墳　86m
山陰　鳥取県馬の山４号墳　110m
若狭　福井県九花峯（きゅうかほう）古墳　39.6m
越前　福井県六呂瀬山（ろくろせやま）１号墳　143m
越中　富山県柳田布尾山（やないだぬのおやま）古墳　108m
東北　福島県亀ヶ森（かめがおもり）古墳　127m、福島県会津大塚山　114m

この時期に営まれた畿内以外の古墳では、このように蛭子山１号墳の145mが多くの地域の最上位の古墳であることがわかる。そして、日本海側としては第一位である。銚子山、神明山の２古墳の200m級という規模は全国的に見て群を抜いて破格。
畿内であれば、大和には10を超える該当古墳があるが、それ以外の畿内では和泉摩湯山古墳など単独墳のものがわずかあるだけ。
それだけに、百舌鳥・古市古墳群造営以前の大和王権にとって唯一絶対のパートナーであったことがわかる。日本海側だけに限定しての評価は不十分
　古墳造営システムの変化
網野銚子山古墳と小銚子古墳のように巨大前方後円墳と大型円墳がセット
五色塚古墳と小壺古墳、雷神山古墳と小塚古墳、甲斐銚子塚古墳と丸山塚古墳等
そのひな形が大和北部の佐紀陵山古墳とマエ塚古墳　陪冢の出現へ　その後、陪冢は周濠に沿うかたちへ　古墳制度の改変　Cf形象埴輪の画期

5.三大古墳に代表される丹後の古墳の特性

（１）丹後型埴輪

丹後型埴輪と因幡型埴輪の論争

在地の壺を載せた形の因幡型と朝顔形埴輪の製作を打ち切った形の丹後型

京都府妙見山古墳の新資料から考えられること：作山古墳の埴輪との関係

（２）埴輪の調整技法Ｃａ種ヨコハケメの探求

網野銚子山古墳の円筒埴輪外面調整の特徴としてのＣａ種ヨコハケメの展開

Ｃａ種ヨコハケメとは、円筒埴輪外面調整ヨコハケメのうち、埴輪自身を回転させながら、工具を止めた状態で外面を平滑に仕上げる調整。須恵器のカキメ調整に類似。

Ｃａ種ヨコハケメは畿内中央では限定的、中心は丹後？

→山陰道に関係する各古墳での様相　とくに乙訓と出雲

木津川左岸綴喜古墳群も連動：山陰道の重要性の高まりを反映

（３）古墳祭祀の先進性

土製供物を用いた墳墓祭祀　蛭子山１号墳、作山１号墳以前から

食の奉納はのちに地方の王権への服属のかたちに

イノシシとイヌの動物形土製品の登場

狩猟行為と墳墓祭祀の結びつきはその後丹波の地域で５世紀後半まで狩猟に関わる絵画として残る。作山２号墳の円筒埴輪の風景画的絵画もその走りか？

大陸から新しい葬送思想を受容。大和北部とともに新たな古墳祭祀創造。

6．5世紀の丹後

（1）丹後を取り巻く地域の変化

若狭の勃興　脇袋（わきぶくろ）古墳群における上ノ塚（じょうのづか）古墳の登場

その後、対外交渉力を背景に、5世紀後半の雄略朝からは前方後円墳続々造営

但馬の雄飛　池田茶臼山古墳の造営　丹後型埴輪を一部取り入れ

その後、茶すり山古墳では大型前方後円墳が許されず、不整円形大型墳になる。

越前は伝統勢力が継続

（2）丹波とともに方墳の盛行

５世紀の丹波の古墳は丹波篠山（ささやま）市の雲部車塚（くもべくるまづか）古墳（丹波道主命陵（たんばのみちぬしのみこと）、全長250m、５世紀中ごろ）を除くと方墳が首長墳、丹後もそして出雲も。

大和王権との政治的従属関係を強く示したかたち

→対照的に若狭は前方後円墳を築き続け、独立性を誇示、そして北陸、東海の諸勢力とともに６世紀前半の継体大王の擁立へ、

まとめ

三大古墳が築かれた原因

前提

弥生時代後期以来の日本海側対外交渉を得意とする勢力であった

半島にも水晶製玉類を輸出していた可能性も

日本海側そして本州内陸各地へもアクセスできる地勢的環境

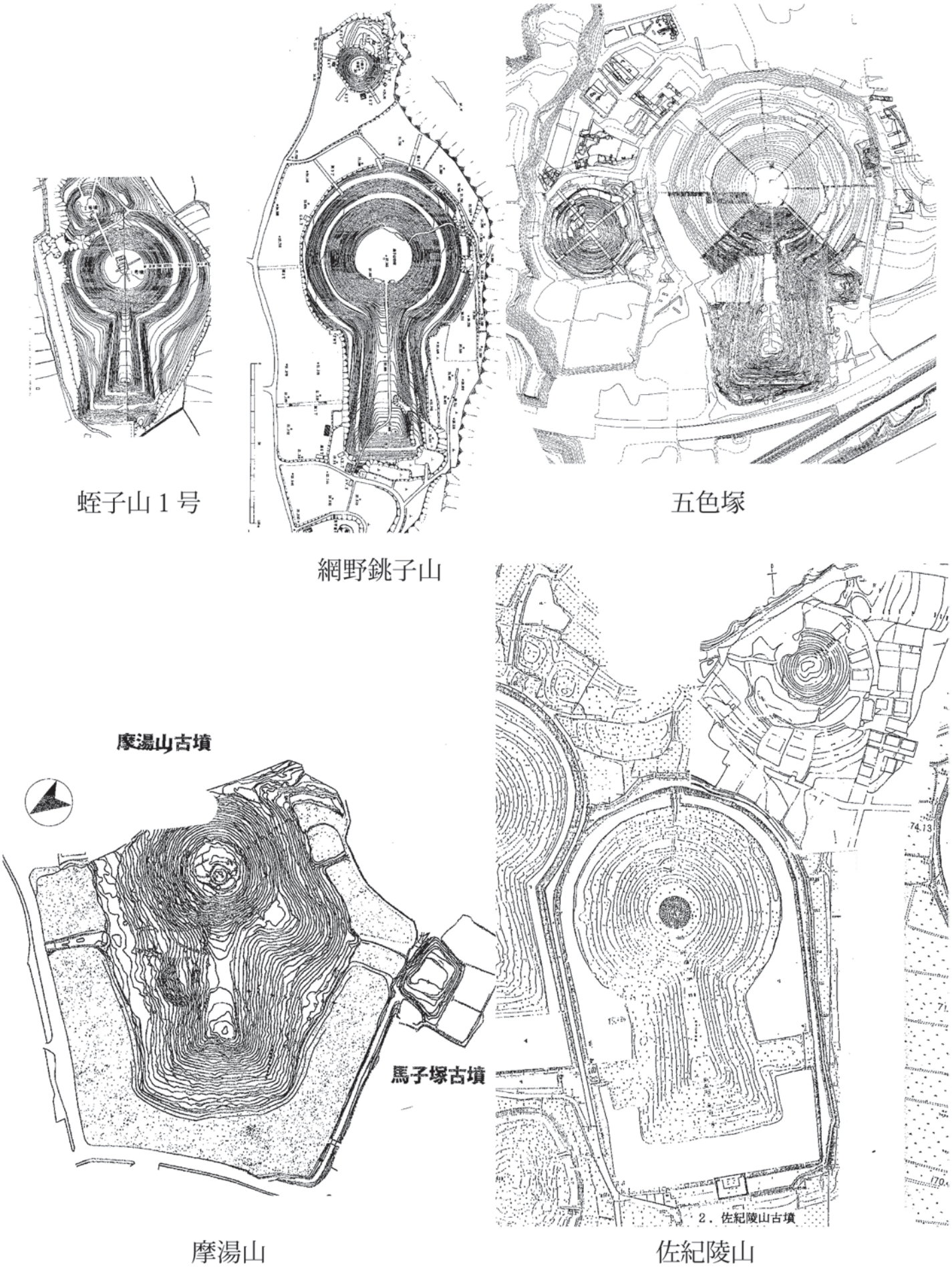
４世紀後半における対外交渉の変化

対中国外交の途絶、沖ノ島航路の開拓←韓国加耶（かや）連合における金官加耶（きんかんかや）の成長。筒形銅器に象徴される半島文化・技術の受容。ともに、半島から葬送観念や海上他界観など受容ないし、影響を受けた可能性。作山１号墳の周辺埋葬は殉葬か？

中国王権の動乱に原因の求められる東アジア世界の再編の動きに乗じて、大和の新王権＝佐紀王権が台頭。パートナーが丹後の勢力。

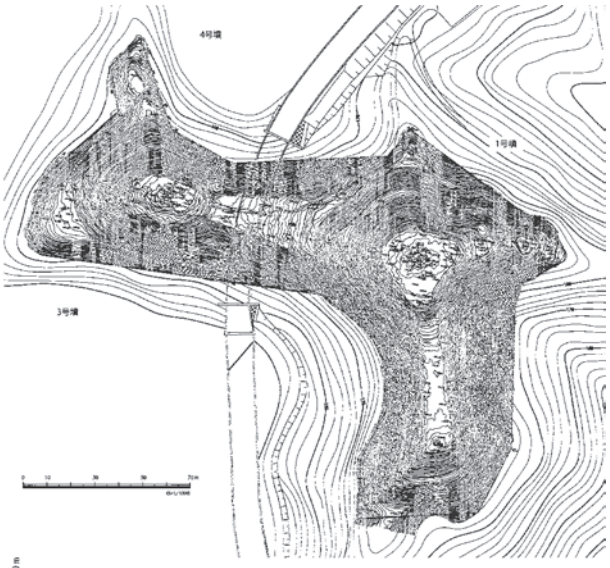
ただし、佐紀陵山古墳の規模は207m

このときの海上交通の重要性が、丹後舞鶴の千歳下（ちとせしも）祭祀遺跡の形成へ。丹後一宮（この）籠神社につながる祭祀のはじまり



第１図　丹後三大古墳と関係古墳１（１：3200）

手繰ヶ城山



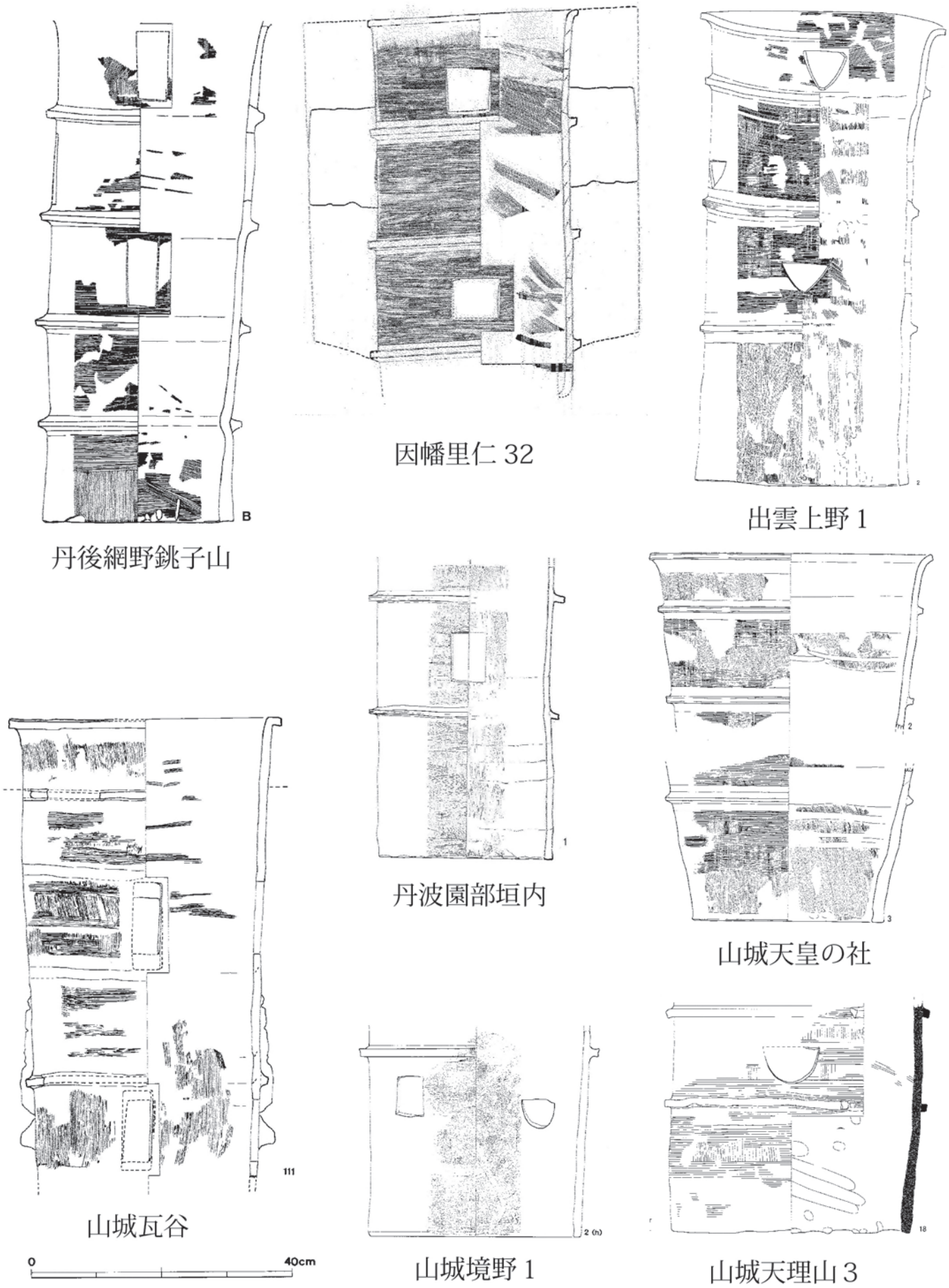
六呂瀬山

松林山

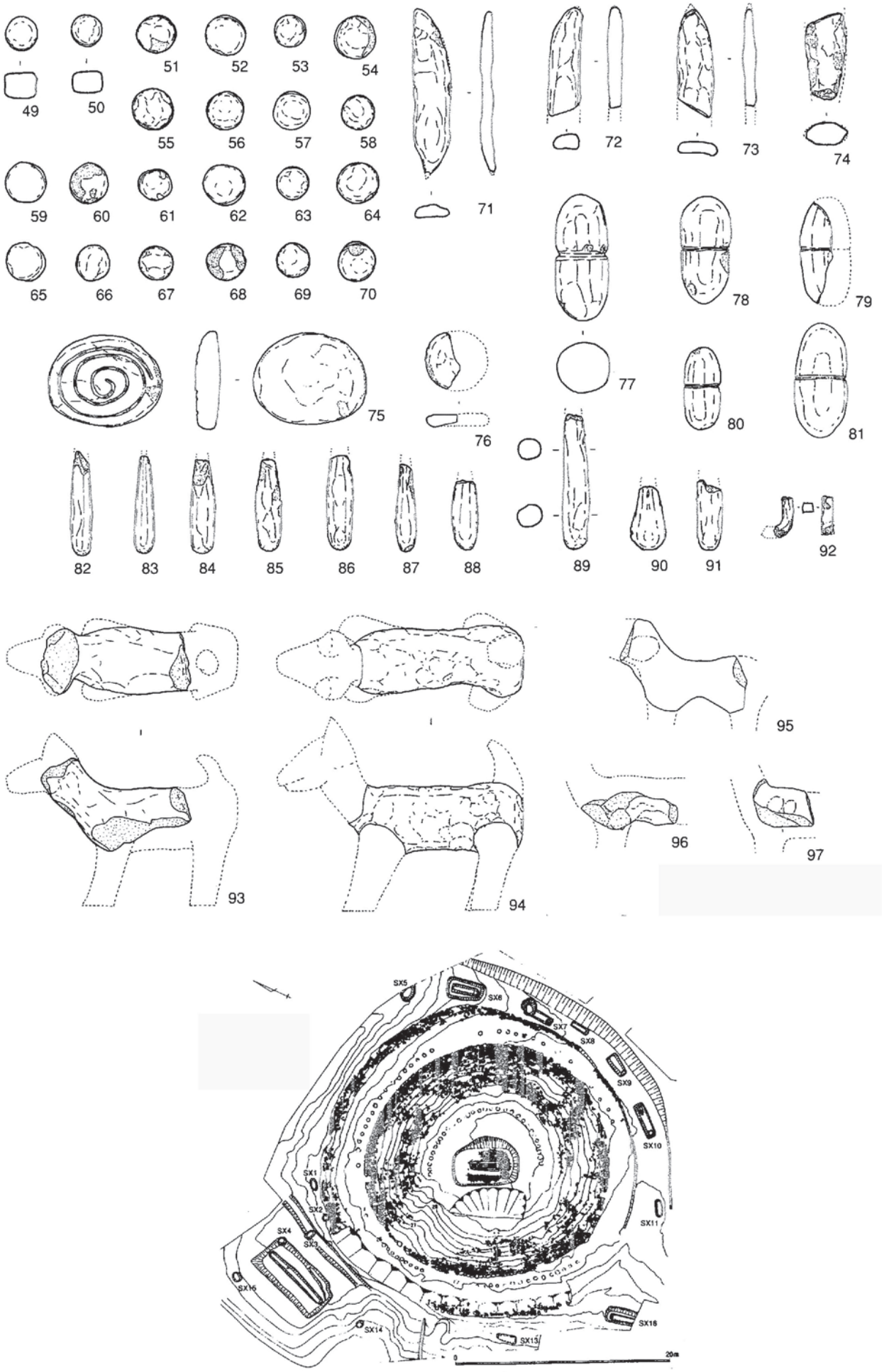
甲斐銚子塚

雷神山

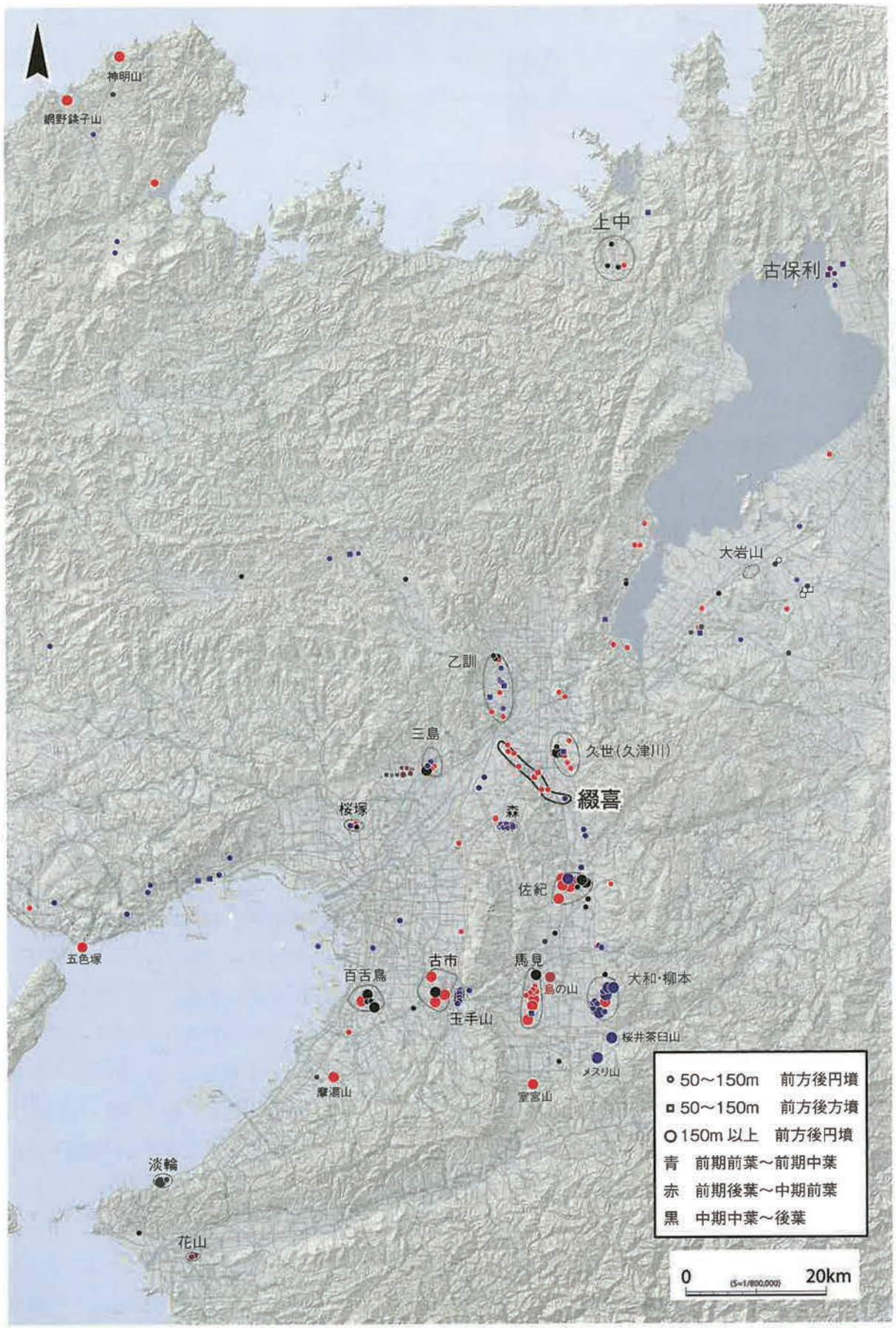
第２図　丹後三大古墳と関係古墳２（１：3200）



第３図　Ca種ヨコハケメを多用する埴輪（１：８）

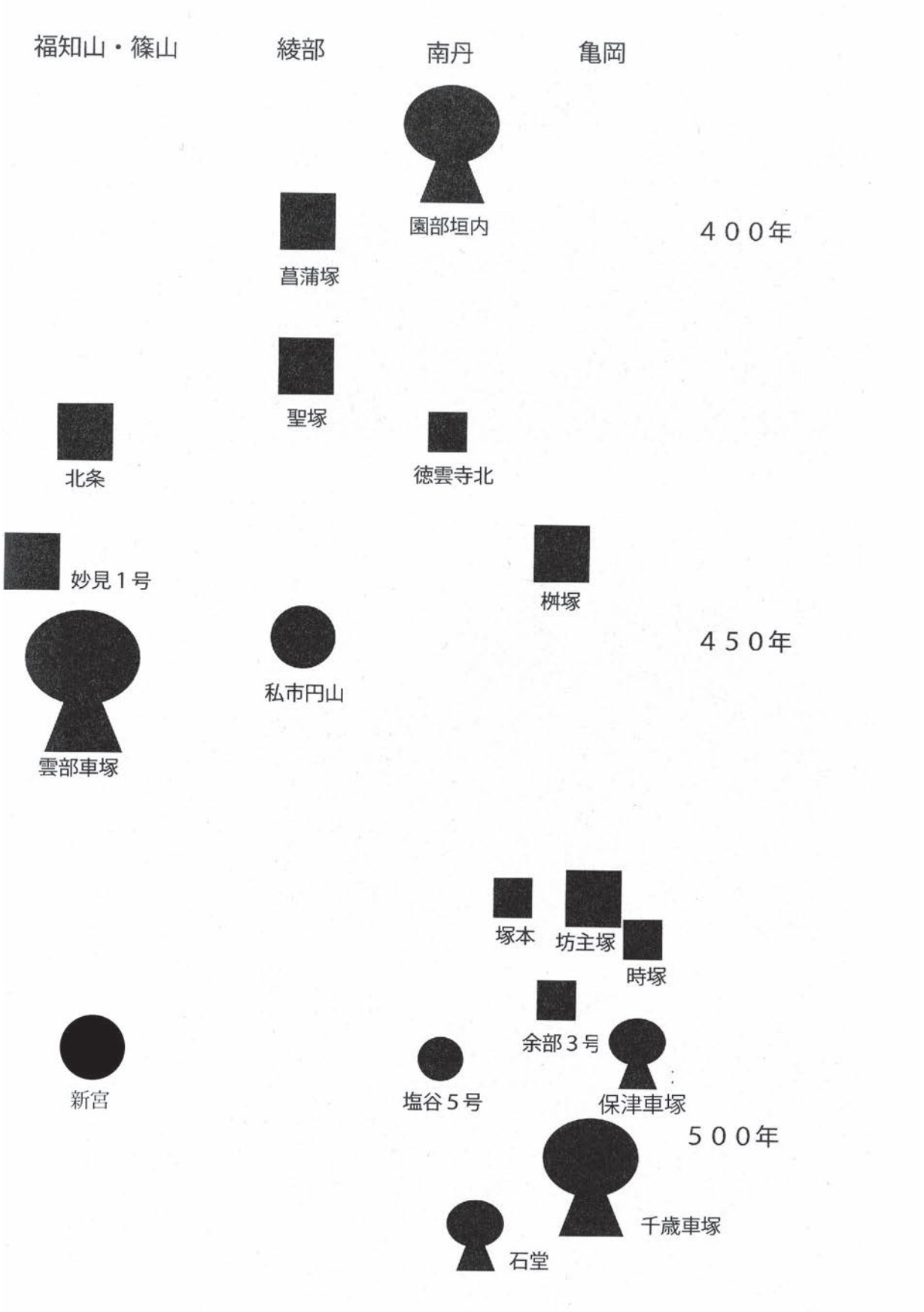


第４図　作山１号墳と土製供物・動物形土製品（１：４）



第 120 図　近畿地方の古墳時代前・中期首長墓分布（国土地理院地図及び国土地理院『陰影起伏図』を元に作図）

第５図　丹後と大和をつなぐルート（京都府教育委員会2022『綴喜古墳群』）


福知山・篠山
綾部
南丹
亀岡
園部垣内
４００年
菖蒲塚
聖塚
北条
徳雲寺北
妙見１号
桝塚
４５０年
私市円山
雲部車塚
塚本
坊主塚
時塚
余部３号
新宮
塩谷５号
保津車塚
５００年
千歳車塚
石堂

第６図　丹波の古墳編年

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

第 150 回埋蔵文化財セミナー資料
発行日　令和 4 年 11 月 23 日（水・祝）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189